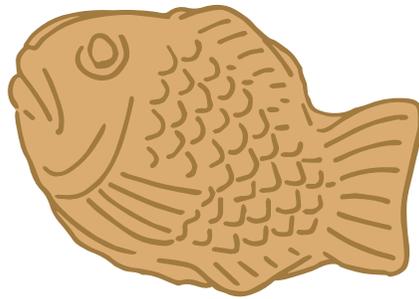


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2017年11月 NO.200



[もくじ]

- 2～3 わたしの表現活動について…古川ひろみ
- 4～5 図書館を便利に使うスマートフォンアプリ「びーこん館」について…今井一雅・水野裕晴・上岡真土
- 6～7 幕末の「前衛」画家、絵金…黒瀬陽平
- 8～9 『文旦好きがこうじて』の出版後、土佐文旦の魅力をまとめるとするならば……松田雅子
- 10 「アンテナ」根付作家「森さん」との出会い…下尾仁
- 11 とさつ子タウンと私…半田唯衣
- 12～13 高知市文化振興事業団8月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

わたしの表現活動について

古川 ひろみ

わたしは高知県高知市在住、三十五歳の主婦です。普段は主婦業と週に数回パートをする傍ら、ギターで弾き語りライブをしたり、アクセサリー作家として活動したり、絵を描いたりしています。

思えば、わたしの人生は常にクリエイティブなことと共にありました。物心ついた頃から絵を描き、中学生で曲作りやライブ活動を始め、大人になってからはアクセサリーの制作販売。最近ではブログやYouTubeでの情報発信もしています。DIYで自分が使う家具を作るのも大好きです。一見するとバラバラな活動に見えますが、全てが広い意味で「モノ作り」という一本の線でつながっています。

【アクセサリー作りについて】

アクセサリーは、手軽に自分らしさを表現できるツールです。



furukawa hiromi



FurukawaHiromi

例えば、Tシャツにジーパンというシンプルな服装をしていても、身につけるアクセサリーですの人の印象はガラッと変わります。可愛らしいポップなもの、女性らしい華奢なもの、ハードなものや、オーガニックなものなどなど…。わたしが作っているアクセサリーには、洗練された個性と丁寧に作られたものに身を付ける大人の楽しみを感じて欲しいという思いが込められています。買ってくださる方々は、わたしのそんな思いに共感してくれているんだと思います。物が溢れた今の世の中で、これは最高の喜びです。わたしが作ったものを選んでくれた

方々が、大勢の中で輝いてくれることを常に望みます。

【絵を描くことについて】

絵を描くことは、わたしにとって視覚の表現です。あまり意識はしていないのですが、今わたしが描いているものは抽象画ではなく、写実画に分類されるものだと思います。実際に目で見て受け止めた世界をそのまま描いているからです。

わたしにとって絵を描くということは本当に楽しく刺激的なことです。

動物を描くことが多いのですが、対象物をよく観察していると、それまで認識していなかった細かい部分に気づくことができます。一本一本の毛並みや、瞳の中の細かい模様、光。それらをわたしが受け取り、絵として描き出した時、



わたしの命と対象物の命が繋がる気がします。そして、その絵を見た方々が、わたしが見たものを受け止めたとき、そこにまた新たな繋がりが生まれます。

言葉にするのはとても難しいのですが、わたしを含め、生き物が生まれて消えていく儂い時間の中で、その繋がりは本当に大切なかなものです。

ずっと写実的な絵を描いていますが、今後はその枠を超えた絵もたくさん描きたいと思っています。写実画は見たものをそのまま描く必要があるため、わたしの主観をできる限り排除しなければなりません。それはそれで、とても楽しいし、追求できるものは無限にあります。しかし、「見る」という行為の中に、わたしの主観である「心の目」を加えれば、写実的な表現だけでは得られない新たな繋がりが生まれる気がしています。そうなれば、わたしにとって絵を描くということが、視覚の表現という枠を超えていくかもしれませ

ん。

ところで、写真のような絵を描いていると、しばしば「写実画は芸術なのか？」という議論に出合います。

というのも、写実画を突き詰めると行き着く所は写真です。今わたしがお話ししたような繋がりは写真でも生まれる感動で「じゃあ写真でいいじゃん」というジレンマにぶつかります。では、なぜ取えて絵で表現しようとするのか。その理由は「これ、描いてるの？すごい!!」と言われて承認欲求を満たしたいという事だけなのかもしれません。褒められたいいため、取えて険しい山を登る。でも、わたしは人間のそんなチャレンジに、ロマンを感じずにはいられないのです。

「写実画が芸術なのか？」という議論の答えはわかりませんが、そういった議論も文化を育てていく材料の一つだと思うので、それもまた意味のあることです。

ただ、わたしは「写実画は人間のロマン」であると言い切ろうと思いません。

【音楽活動について】

真面目に向き合ってきた時間が一番長いので、わたしのアイデンティティは音楽活動にあると思っています。

音楽と一言で言ってもその種類は広いです。どんな音楽も幅広く大好きなのですが、わたしが自分で取り組んでいる音楽は、歌詞があり、歌がある、いわゆるポップスと呼ばれるものです。



わたしが初めて演者としてステージに立ったのは十四歳の頃。当時はなにか楽器ができるわけではなく、歌が歌いたい一心で曲を作り、お小遣いで買ったキーボードを使って感覚で伴奏を付けました。見切り発車で友達を引っ張り込んでライブをしたのですが、今思えばかなり無謀なチャレンジでした。

けれど、あの一歩があったから今のわたしがいます。

それから約二十年。いろいろな経験を経て、今は一人でギターを弾き語っています。

作詞をすること、メロディーを作ること、アレンジをすること、演奏をすること、ライブでのパフォーマンス。それらは似て非なるもので、どれが欠けてもわたしの思う「いい音楽活動」はできません。

ときどき、技術的なことや知識的なことを否定し、音楽は心で奏でるものだという人がいます。確かに心は何より大切ですが、その心を表現するための技術がなければ、聞き手には決して伝わりません。せつかく素晴らしい感性があっても、表現するすべを持っていないければ存在しないのと同じです。技術や知識という土台の上にある心は、何よりも感動的です。

とは言え、今のわたしはテクニカルな面ではまだまだ字ばなければいけないことだらけです。とくにわたしは幼い頃から楽器をやっていたわけでもなく、天才的に歌がうまかったわけでもないのに、人一倍その心を忘れずに、生涯音

楽活動に向き合っていきたいと思っています。

【最後に】

「自分がしている表現活動について」というテーマで執筆依頼をいただき、考えました。「わたしはモノ作りをとおして、一体何を表現しているのだろうか?」

考えれば考えるほど、わたしはモノ作りをとおして「自分という人間」を表現しているんだという答えにたどり着きます。自分の内面を、共感をとおして誰かの心に具現化したいんだと思います。それは、わたしにとって生きるということそのものなのです。

ふるかわ ひろみ

高知市出身、地元で活動するシンガーソングライター。
アコースティックデュオ「スワンフィー」では、ローカルCMへの楽曲提供やラジオ番組のパーソナリティを務めたほか、二〇一四年からは音楽活動と並行してアクセサリー作家としても活動中。

図書館を便利に使うスマートフォンアプリ「ビーこん館」について

今井 一雅 水野 裕晴 上岡 真土

高知龍馬空港の東に、5年制高等教育機関の国立高知工業高等専門学校（以下、高知高専）があり、創造的・実践的技術者の育成を行っています。

同校の今井一雅教授の研究室では、以前から無線（Bluetooth）を使う小さなデバイス「Beacon」（以下、ビーコン）を活用して、スマートフォンで動作する実用的なアプリの研究開発を行っています。過去には、2014年の全国高等専門学校プログラミングコンテスト（以下、全国高専プロコン）での最優秀賞や、2015年の第6回ものづくり日本大賞で内閣総理大臣賞を受賞するなど、活発に研究活動を行っています。今回は、現在試用段階にあります、図書館を便利に使うスマートフォン用のアプリ「ビーこん館」をご紹介します。

「ビーこん館」を開発するきっかけは、木星電波の研究（仁淀川町にある吾川木星電波観測所でも観測を行っています）をしている今井教授が、2018年夏に開館予定の「高知みらい科学館」（以下、科学館）のアドバイザーに2013年12月に就任したことでした。当初は、科学館のアドバイザーとして、科学館の利用を促進するようなアプリの開発を検討していました。しかし、実際に科学館が開館するまでにはまだ数年あり、それまでにアプリ開発に役立つような実証実験はできないかと考えました。そこで、科学館が入居する建物「オーテピア」に、高知県立図書館と高知市立市民図書館本館が合築する「オーテピア高知図書館」も入ることから、建物が現存していて一定の広さがある高知県立図書館を実験場所としてアプリ開発実験をという提案を行い、高知県立図書館長にご快諾いただき2015年にプロジェクトがスタートしました。



その時点では、全国高専プロコンへの参加を考えていたため、今井研究室の卒業研究生で高専の最終学年の5年生4人がチームとなり、「図書館の利用を促進するビーコンを活用したスマートフォンアプリ」というテーマで全国高専プロコンに応募し、2015年6月の予選通過後、開発に着手しました。

高知県立図書館は都道府県立図書館としては面積が最小の規模ですが、実験にはちょうど良い面積で、2階のフロア（約1,000平方メートル程度の開架スペース）に80個のビーコンをメッシュ状に設置し、検索した本の位置をスマートフォン上の館内マップに表示して、自分の位置をビーコンで表示しながら本の場所まで誘導するナビゲーション機能を持つアプリ開発を行いました。開発は4人で分担して行い、全国高専プロコンには、iPhoneやiPadで使えるiOS版とAndroid版の両方を出品しましたが、残念ながら賞を頂くことはできませんでした。

この全国高専プロコン後の2016年度は、就職や進学などのため、チームメンバー4人のうち、研究室に残ったのは専攻科に進んだ水野裕晴ひとりとなり、開発を継続するために、Android版アプリの開発に絞ることになりました。そして、高知県立図書館のスタッフの方々の意見も聞きながら、より実用的な機能を中心に改善を行いました。

この実用的な機能の中でも、「読書通帳」機能という、図書館で借りた本の情報をアプリに履歴として記録し、感想をメモすることもできる機能は、アプリの目玉です。記録方法も図書館入口のビーコンにスマートフォンをかざすか、アプリ側で自動的にチェックを実施するか選択できます。この「読書通帳」は、色々な図書館でさまざまなやり方のものが提供されており、単に自分で書き

込みをする紙の読書通帳から、同じく紙の読書通帳でも本当の通帳のように印字できる機器を必要とするもの、システム上に履歴を保存する WebOPAC の履歴機能を使うものなど色々なものがあります。しかし、「びーこん館」ではそれらと異なって、利用者のスマートフォンアプリの中に履歴情報の保存ができ、自分自身で読書履歴を管理できるという大きなメリットがあります。

さらに便利な機能として、借りた本の返却期限をスマートフォンに通知する機能も追加しました。これは、忘れがちな本の返却期限が来る前にお知らせをしてくれるお助け機能です。また、高知県立図書館 2 階の開架書架のみの対応ですが、ビーコンの位置精度を高めることにより、画面上の館内マップに検索中の本のおおまかな位置と利用者の現在地を表示させることで、目的の書棚までたどり着ける機能を、実用の域に到達させることができました。

そして、開発から 2 年が経過した 2017 年 6 月 23 日に実証実験を開始しました。開始初日の様子が、高知新聞や読売新聞、日経新聞、テレビ高知など複数のマスコミで報道されるなど、アプリの機能を利用者にとって利便性の高いものにしてきた今までの努力が報われたように感じました。現在は、実験開始から 4 か月が経過し、利用する端末の種類や OS のバージョンによって機能が正しく動作しない現象の改善や、iOS 端末用アプリの要望などが寄せられています。これらの要望に対応できるように、日々改善を続けております。

「びーこん館」の実証実験は高知県立図書館の閉館に合わせて年内に終了します。2018 年 7 月開館予定のオーテピア高知図書館で利用できるアプリとして正式にリリースを目指すには、iOS 版の開発、長期的なメンテナンス体制、開発・メンテナンス費用の確保など、多くの課題が残されています。しかし、高知高専と高知県立図書館が連携し、スマホ世代の学生の感性で作られた「びーこん館」には、スマホ世代の若者による公共図書館の利用促進増大への大きな魅力があると感じております。

来館や利用者登録をしていないと使えない機能もありますが、このアプリをダウンロード (Google Play にて「びーこん館」で検索下さい) して、誰でも使うことができます。アプリ内では、アンケートも実施しており、機能の改善をさらに行っていきたいと思っておりますので、年内の実証実験期間中に是非ご意見をお寄せいただけたら幸いです。



いまい かずまさ	高知工業高等専門学校教授。
みずの ゆうせい	高知工業高等専門学校専攻科生。
かみおか まさと	高知県立図書館司書。

幕末の「前衛」画家、絵金

黒瀬 陽平

ぼくは野市町の出身だ。もちろん、実家も野市にあるので、帰高

するときはまず野市に帰る。ぼくは自分の仕事、つまり美術のことについては、土地や地域のリサーチをそれなりにやるほうだし、「郷土愛」なるものも、それになりにあるつもりだが、野市のことについては、正直あまりよく知らない。まあ、えてして地元とはそういうものなのかもしれない。案外、人は身近なことについては知らないものだ。

ただ、お隣の赤岡町については、少し話が違ってくる。なぜなら、

「絵金祭り」があるからである。

七月の絵金祭りをはじめて体験したのは幼少期だったが、夜店が並ぶ普通の縁日のなかに、突然あらわれるおどろおどろしい絵金の芝居絵のインパクト、そして、それとはまったく無関係に盛り上がる広場のフラダンスやカラオケ大会のコントラストは、特殊な体験として子どもの記憶に刻みつけるに足る、異様なものだと思う。母方の実家が高知市朝倉にあるので、朝倉神社の絵金祭りの印象も強く、絵金祭りは、ぼくの幼少期における、とても大きな美術経験だった。

もちろん、高知の祭りといえば、

よさこい踊りである。しかしぼくは、いつのまにかすっかり「競技」のようになってしまったよさこい踊りが嫌いだったし、夏が近づくと色気づいた同級生たちが無意味な練習に励む姿を冷ややかな目で見ていたという、大変に屈折した青春時代を送っていたので、やはりぼくのなかの祭りは、絵金祭りだったのである。

なにより、絵金は、高知が輩出した画家のなかでも、突出した才能を持っている。河田小龍、山脇信徳、日和崎尊夫など、歴史に残

る高知の画家はたくさんいるけれど、絵金ほど飛び抜けた才能はきわめて稀であると言っているだろう。絵金祭りの独特の雰囲気は、他の土地の祭りにはない独特さであるが、それ以上に、絵金の残した芝居絵は、日本美術史上でも異様な存在感を放っているのである。

しかし、絵金がこれほど重要な作品群を描き、かつ、絵金祭りという特殊な風習とともに残っているにもかかわらず、絵金についての本格的な研究や批評は、あまり多いとは言えない。おそらく、日本美術史研究において、絵金が始めてマトモに紹介されたのは、一九六〇年代末に辻惟雄が提唱した「奇想の系譜」の画家たちのラインナップに入れられて以降だと思いが、奇想の系譜というコンセプトによって大ブレイクした若冲や曾我蕭白、長沢蘆雪などに比べて、絵金についての研究はほとんど進んでいない。

数年前、たまたま高知の金高堂で、吉良川文張『絵金その謎の軌跡―土佐の芝居絵師・金蔵』（二〇〇八年、高知新聞社）という本

を見つけ、読んでみた。様々な伝説や逸話で覆われた絵金の生涯について、吉良川は独自の仮説によってその謎を解こうとしており、

とりわけ、狩野派絵師としての修行時代の「飛び級」伝説についての疑問や、絵金が御用絵師から流浪の芝居絵師に身をやつすきっかけとなった「贋作事件」についての仮説は興味深かった。しかし残念ながら、吉良川の仮説は十分な根拠は示されておらず、推測の域を出るものではない。なにより、吉良川の興味は、絵金の人物像や伝説に向いており、作品分析ではない。

そもそもなぜ絵金は、あのような独自の芝居絵を描くことができたのか。ぼくの知る限り、このようなストレートな問いについてヒントを与えてくれるのは、大久保純一の絵金分析である。大久保は、絵金の芝居絵に、江戸の役者絵からの強い影響を読み取りながらも、なぜ江戸の役者絵のように、人気役者の「プロマイド」のような構図ではなく、一枚の屏風のなかにたくさんの異なる場面が描かれ、

複雑な「異時同図」になっているのか、という問いを立てている。

このように、絵金が江戸の芝居絵のような舞台上の瞬間を切りとることなく、一連の幅を持った時間を表現したのはなぜだろうか。おそらくは、台提灯を見上げる人々に、一種の「絵解き」的行為を要求したためではなからうか。人々は、自分自身のなかで芝居の筋をたどりながらこの絵を見、また筋を知らないうちに絵を指し示しながら語り聞かせたのであろう。「伊賀越道中双六」の幸兵衛の雪道帰宅の部分や、「葛の葉子別れ」での天井の狐の本性などは実際の舞台上では演じられないものであるが、話の筋を追う上での便宜上描き加えたものであろう。

大久保の仮説は、実に興味深い問題をはらんでいる。絵金の芝居絵が「絵解き」されることを前提に描かれた「異時同図」の芝居絵だったとすれば、それは、土佐という田舎で描かれたことと大いに

関係している。逆に言えば、なぜ江戸で絵金の芝居絵のようなものが描かれなかったかと言えば、江戸の芝居好きは、ほとんど日常的に劇場へ足を運び、当然ながら芝居の筋も頭に入っている「オタク」であり、わざわざ芝居絵で物語を説明する意味がないからだ。

江戸の芝居オタクたちは、自分が好きな役者の絵さえ手に入れば、実際の芝居はいつでも劇場で見られるし、物語の筋はいつでも脳内で再生できる。それに対して、土佐にはそこまでの芝居オタクはあまり居なかっただろう。絵金は、そのようなりテラシーの低い客たちに、物語の筋から説明できる芝居絵を提供するために、独特の「異時同図」を開発したのではないか、という仮説なのである。

さらに、大久保はほんの少ししか言及していないけれども、最も重要なのではないかと思われるのが、天保の改革の影響である。贅沢を禁じた天保の改革の影響で、高知城下でも芝居の上演が禁じられる。もし絵金が、天保の改革によって芝居を見ることを禁じられ

た人々のために、あの独自の芝居絵を描いていたのだとしたら、どうだろうか。大久保が「芝居の代償」としての機能」とさえ言っているように、実際の芝居を見ることが禁じられた状況で、上演のかわりに「絵解き」を楽しむ、という役割があつたのかもしれない。

だとすれば、芝居が禁止されたことによって、「芝居の代償」としての芝居絵が生まれ、時代を経たのちに、今度はその芝居絵を中心とした祭りが創られた、ということになる。江戸から離れた田舎町で、さらに禁令によって抑圧された状況のなか、それを逆手に取って既存の表現を刷新してしまう。絵金もまた、土佐の「前衛」の起源なのかもしれない。

くろせ ようへい

一九八三年高知県生まれ。

美術家、美術批評家。ゲンロンカオス・ラウンジ新芸術校主任講師。

『文旦好きがこうじて』の出版後、 土佐文旦の魅力をまとめるとするならば…

松田 雅子

家事が一段落し、ほっと一息つける時間…

祖母はよく、家族のための繕い物をしていた。

チクチクと針を進めながら無心の時を刻み

慌ただしかった一日をゆっくりクルダウンしていく…

私にとっては、文旦を剥く時間がそれだ。

無類の映画好きなので、借りてきたDVDをセットしたり、

録画していた映像を見たりではあるが

文旦の甘酸っぱい香りに包まれながら

心を解き放つ時間はまさに、至福のひとつときである。

甘さと酸味のバランスが、た 「土佐文旦」そのものと同じくら

まらなく好きな柑橘「土佐文旦」。

本にも書かせていただきましたが、ズン、私にとりましては、なくて

はならないものです。

日中バタバタと、いつも慌ただ

しく動き回っている気分。ともす

ると、まだ昼間の興奮が心と体に

残っていて、布団に入ってから

も、なかなか寝付かれないことが

あります。しかし、文旦山の麓に

嫁いだことや、友人・知人に文旦

農家さんがたくさんいることもあ

り、一日の終わりによく文旦を剥

くようになってから、そういうこ

とが全くなくなったように思いま

す。明日よるこんで食べてくれる

人の顔を思いながら、リラクゼー

ション効果があると言われる文旦の香りに包まれるひととき。このワンクツションで快適な睡眠を得られると、それはまた明日の活力を生んでくれます。

お陰様で『文旦好きがこうじて』出版後はうれしい反響がありました。金高堂書店でベストセラー一位をいただき、また、上半期の販売数でも四位をいただきました。その後、和歌山県で開催された「みかんサミット」に呼んでいただけたり、来年二月、東京のアンテナショップやタカノフルーツパーラー新宿本店で、文旦ムキムキイベントをさせていただくことが決まったり、ワクワクすることが続いています。

「まんぼさん（筆者の愛称）くらいムキムキの楽しさにはまってくれる人がおったら、全国に土佐文旦ファンはもっと増えるよね」と言っていたとき、「文旦は、房毎に分けて少し乾かしておくとか、剥きやすい」とか、「いろんな楽しい文旦ムキムキグッズがあります

よ」とか、文旦ムキムキLifeの中で気がついた小さなムキムキのヒントやコツをお伝えできればと奮闘した日々。その中で「これは是非、全国のご家庭やお店に流行らせたい！」と思っているのが「文旦皿鉢」です。



家族や仲間の集まりやパーティーに、よく「文旦皿鉢」を作っているのですが、これがもう、すごい人気なんです。文旦特有のさっぱ

り感が、デザートにぴったりで、特に、女性や子どもさんが多い場合は、出すと同時になくなってしまう。

また、本を作るにあたっては、たくさんのお店シェフや料理長にご協力いただきました。その取材の中で、私以上に「土佐文旦の魅力」を語ってくださったのが、高知の地元食材と日々向き合っておられるシェフや料理人、料理家の方々でした。

「レストラン三木ドゥーブルさんのページより」

「酸味・甘み・苦味、美味しい文旦は、その三つの味のバランスが絶妙なんです。文旦は多分これから日本だけでなく海外のシェフ達にも注目される食材になる『珍しさ・面白さ』を持っていると思いますよ。

まず、料理にした時の美しさ、それから、私がお柑橘と一番違うと思うのは、文旦の旨味（水分）が、一粒一粒の中に、ちゃんとお

さまっているということなんです。口当たりの良さもそうなんです。召し上がっていたときに、口の中に広がる何とも言えない清涼感、美味しさ、これをどう料理していくか、どんな食材と合わせていくか？考えるのが面白いところなんです」

また、resort dining Se Relaxer（りぞーとだいにんぐするらくせ）の山本シェフは、文旦をまるごと使った「高知産文旦プリン」をご紹介くださいました。「文旦をまるごと使ってみたかったんですよね」と、山本シェフ。プリンには文旦の皮の白い部分が使われているようで、独特のトロトロ感がたまりませんでした。ソースも文旦ジュースで作られていましたし、プリンの上にはちよこんと文旦の実。黄色系グラデーシヨンのアクセントには、文旦の皮で作ったピールが使われていました。本当にまるごと文旦をいただいたような、細部で違った味わいが楽しめる一品でした。

『まさにお皿の上の芸術！三木さんのお料理に、文旦がフレンチの世界でまだまだ広がる可能性を見た』の本書のページタイトル通り、「お皿の上の芸術」を目指すフレンチやイタリアンの世界で、文旦の需要はまだまだ伸びると確信いたしました。

まつだ まさひら

一九六二年、高知県高岡郡佐川町出身、高知市在住。

アトリエよくばり子リス代表（ライター・コーディネーター）、映像記録「思い出がかり」、学校法人龍馬学園非常勤講師（芸術）として活動するほか、ご当地ソングも制作中。

現在の関心ことは文旦ムキムキ。お問合せは korusu@lime.ocn.ne.jp まで。

「アンテナ」 根付作家「森さん」との出会い

下尾 仁

周波数を合わせれば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたてて沢山の人と繋がる。すると、面白いことがやってくる。

皆さんは根付をご存知でしょうか？ 根付とは、江戸時代に煙草入れ、矢立て、印籠、小型の革製鞆（お金、食べ物、薬といった小間物を入れた）などを紐で帯から吊るして持ち歩くときに用いた留め具である。

今回は、そんな根付を作っている根付作家、森謙次さんを紹介したい。

森さんとの出会いは、高知市文化振興事業団が行っていた「詩のボクシング」という、ボクシングのリング上で青コーナー、赤コーナーに分かれ、詩を読みあい、トーナメントで勝ち上がっていくというイベントだ。森さんはゴルゴン

ゾーラ森というリングネームで、独特な雰囲気とアルコールの匂いを漂わせ、独創性の高い詩で並居る強者をバツタバツタとなぎ倒し、あれよあれよと二〇〇八年の詩のボクシングで優勝した。

その時、森さんが勝ち上がるたびに僕は森さんの手を上げた。そう、僕はレフリーをさせてもらっていたのである。

誰よりも間近で詩を聞いていた僕は、なんとも高知にはすごい人がいると思ったものだ。詩の内容はまったく覚えていないが、熱量は今でも鮮明に覚えている。

それから森さんとは道でちよくちよく顔を合わせ、挨拶をする仲間になった。話をすると、なんと学年は違うが小学校も中学校も同じで近所さんだという事がわかった。そんなこんなで仲良くなり、二〇一二年パフォーマンスユニツ

ト「森ガール」を結成、現在まで沢田マンションで四回、コレンスで一回、年に一回のペースでパフォーマンスを発表している。

パフォーマンスは主に森さんがやりたい事をやる。例えば初めてのパフォーマンスは、森さんがツルに、僕がカメラに扮して楽しげな音楽にあわせて踊り酒を酌み交わし、やがてツルとカメラは重なり合っただけの子供を授かるという、なんともめでたいパフォーマンスだった。

どういったパフォーマンスをやるかとの話し合いでは、森さんのアイデアは泉のように溢れ、こんな衣装でこんなものを作りたい、こんな音楽で派手にやろうとなるのだが、本番が近付いてくると、まあいいかと最初の内容から三割程度に落ち着く。当然作り物はしよぼくなる。練習もすくすくたがるのだが結構ドタキャンが多く、まともに練習できず本番はドタダのダメダメになることが多い（まあ忙しい人なのでしかたがない）。でも僕は、そのゆるさと



段取り通りいかなない感じがすごく気に入っている。

パフォーマンスはおすすりめできるほどの物ではないが、森さんの根付作品は、ほんとうにすごい。根付コレクターとしても有名な高田宮家も所有し、高田宮家コレクションとして婦人画報にも掲載されるほどである。

東京、京都などが主な取引先だが、高知でも年一回ぐらいは個展またはグループ展をひらいているので、是非作品を見てもらいたい。

そして森さんにも会ってほしい。この人がほんとうにこんなすごい物を作っているのかと思うかもしれない。森さんに出会えて感謝。



しもお ひとし

一九六九年生まれ
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

とさつ子タウンと私

半田 唯衣

私がこの活動に参加するきっかけとなったのは、父親の「こんな募集しゆうけどやってみる？」という一言でした。以来夢中になり、今では生活の一部、これが終わらないと夏が終わらない、というほど、私の中では大きな存在となっています。

その活動というのは、「とさつ子タウン」です。とさつ子タウンとは、毎年夏休み期間に二日間だけ現れる架空のまち。このまちの市民は、小学校四年生から中学校三年生までの子どもたちであり、子どもが運営するまちとなっています。

私もとさつ子タウンには、小学生の時に市民として参加していました。当時のことはあまり詳しく覚えていないのですが、スタッフとして関わるようになった今、ま

ちの中で楽しんでいる子どもたちを見ると、楽しかった記憶を思い出します。また、それと同時に自分たちでこのイベントを作り上げてきた喜びを実感します。

私は高校一年生の頃から実行委員会に所属しており、現在は副実行委員長として活動しています。

とさつ子タウンに関わることにより、他のボランティア活動にも多く参加するようになったり、全国こどものまちサミットに参加し、県外のこどものまちのスタッフと交流したり、自分の活動の幅が広がりました。知らないことや、やったことがないことに挑戦するのは、とてもワクワクします。こうやって色々なことに挑戦させてもらえる環境に、私はとても感謝しています。

このようにボランティア活動に

参加していると、たくさんの人に会える機会があります。たくさんの人と出会うことで、人とふれあうことが好きになりました。私は今、高知県立大学の社会福祉学部で学んでいるのですが、とさつ子タウンに関わったことはこの学部を選択したきっかけのひとつです。

とさつ子タウンで出会った方の中には、社会福祉学部の先輩もいて、その方たちの立ち振る舞いや、何事にも積極的な姿勢は私の憧れの姿でした。もともと社会福祉は父の仕事でもあり、小さい頃から身近にあるものだったので、進路を考える際に社会福祉の道に進むというのは前から頭にあったのですが、決定打となったのはやっぱり社会福祉学部の先輩に出会い、私もこうなりたい！という目標ができたこと。そしてとさつ子タウンでたくさんの人に出会い、人と関わるのが好きになったこと。とさつ子タウンに関わったことは、人生を選択する大きなきっかけになったと言えると思います。

今後このような活動を続けていく中で、これからはもっと人とのつながりを大切にしていきたいと考えています。高知県はいい意

味で狭く、どこに行っても知り合いに会えるような環境です。今あるつながりをもとに、もっと積極的に交流したり、挨拶をしたり、せっかく出会えたご縁を大切に、生活していきたいです。

とさつ子タウンに関わることで大切だと感じたこと。それは、子どもたちの可能性を信じることで、そして自分自身を信じることで、世の中は可能性であふれていると思います。まちで色々なことに挑戦している子どもたちを見ると、できないことなどないのではないかと、私ももっと頑張ろうと、強く思います。

来年でとさつ子タウンは十周年を迎えます。どんなパワーアップしていくとさつ子タウンに、これからももっと深く、関わり続けていきたいです。

はんだ ゆい

一九九八年高知市生まれ、高知市在住。

高知県立大学社会福祉学部一年。

8月の事業から

「東京楽竹団」コンサート&ワークショップ

楽団のメンバー自らが竹を切って楽器を作り演奏する「東京楽竹団」のコンサートを、八月二十七日（日）かるぽーと大ホールで開催しました。

竹だけで創り出される音とは信じがたい低音高音の響きにまず驚き、そして自然な音に癒しを感じます。お馴染みのポップスのアレンジ曲やオリジナル曲の演奏に客席からは思わず手拍子足拍子。

一番の盛り上がりは、公演の前日に行われた、竹で楽器を作るワークショップの参加者十一名が出演するコーナー。

作った楽器を使って楽竹団のメンバーと一緒に演奏。まるで親戚の集まりのようなく異なる年齢の男女が一つの曲を作り上げる姿に、客席からは熱い



公演での演奏シーン

視線と大きな拍手が送られました。出演の最後の感想では、

ワークショップを振り返り「竹に切り込みを入れたり削ったりして、最後に音程を確認しながら微調整したら、さっきまで

ポコポコという音しかならなかった竹からポーンと響く音が出た。とても気持ちよかった」や「来年もやりたい」などの声が聞かれ、それぞれ充実した表情で舞台を降りました。

アンコールは、民謡「竹田の子守歌」のアレンジ曲。竹本来の癒しの音と、その演奏技術の高さを十分に見せつける迫力の演奏に会場全体が魅了されました。

（参加者数・二百五十名）



ワークショップ・楽器製作の様子

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間3,000円(4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで)

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

横山隆一記念まんが館開館十五周年記念

隆一 珍コレクション展 〜珍品・迷品・お蔵出し〜

今年で開館十五周年を迎えた横山隆一記念まんが館では、これを記念した企画展「隆一 珍コレクション展」〜珍品・迷品・お蔵出し〜を二〇一七年四月二十九日（土）から八月二十七日（日）にかけて開催しました。なかなか披露する機会が少なかった横山隆一のユニークな収集品を一举に公開しようという企画で、約七百五十点もの珍品が所狭しと並ぶ様は実に壮観。中には二時間以上かけてゆっくりと観賞していく人もいたほどでした。特に「川端康成の胆石」「毛沢東の葉巻」など、著名人ゆかりの品々は注目度も高く、来場者からは「過ぎた時代を展示品が



「やくみつるの珍宝談義」やくみつるさん（左）と、コーディネーターの左古文男さん

語っている」と楽しむ声が聞かれました。会期中の六月十一日（日）

には、まんが家・やくみつるさんを招いてトークイベント「やくみつるの珍宝談義」を開催。

自身も珍品コレクターであるやくさんは、隆一の発想のユニークさに感心しつつ、おらかな時代性や人間関係の親密さにも着目していました。

一品一品の面白さもさることながら、その時代や文化、人と人とのつながりなど、切り口を変えると様々なことが見えてくる珍コレクション。訪れた人にたくさんのメッセージを伝えたことでしょう。



珍コレクション展会場風景

（来場者数 千五百四十一名）

高知市文化振興事業団 出版物のご案内



高知のエスプリ 一ふるさとの未来を考える―

高知市文化振興事業団 編

あす
一ふるさと高知の未来をさぐる

県内のオピニオン・リーダー五十人が、それぞれの視点で“高知”を捉え、ふるさとへの熱い思いを語る。（平成五年刊）

価格 1,258円（本体価格 1,165円＋消費税）

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち
高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071へ



高知を撮る

第33回写真コンテスト入賞作品

虹立つ棚田

(平成28年12月 大豊町穴内)

青木 英雄

農業も機械化され、実ればすぐに刈取・脱穀され収穫されます。昔のように稲架(はさ)にかけられて乾かすことも少なくなりました。めずらしい風景になりつつあります。

毎年秋、多種多様な団体が協賛して開催されている高知県芸術祭では、県民に、多くの芸術・文化鑑賞や参加の機会が設けられている。この芸術祭の執行委員長という立場から、思いを巡らせたイベントを一つ。

九月に高知市で開催された「わいわいコンサート」は、赤ちゃんや就学前児童でも参加でき、生のクラシック音楽と関わるスタートラインを意識した催しだった。クラシックと聞いただけで取っ付き難いと思っている人もいるだろうが、わいわいコンサートは、赤ちゃんの泣き声ワウー、お子さんキャキャ、短めの親しみやすい曲と軽快なトーク：既成概念の外だ。東京芸大出身の奏者が小さな楽隊を組んで全国を巡回しているそうで、一時間半のエンターテインメントはテンポよく清々しかった。会場には、親や祖父母に連れられオシャレしてやってきた子どもたちの姿が。終わったのはちょうどお昼だったので、この後、食事でもして帰宅するだろう。

等しく感動を



風俗歳時記

小さい頃から、こうした上質の生演奏に触れることは、情操教育として有意義なことだ。その一方で、生演奏を聞かせたいと思っても聞かせざるを得ない親子も少なからずいる。入場料は前売りで一八〇〇円。通常のコンサートより随分安く抑えられているが、高知県の最低賃金でいうと二時間働いても及ばない金額である。奢侈品より食という家庭もある。来られない子どもの中にも、音楽が好きだったり、本物の楽器の音色に触れたい子もいるだろうが、そうした子どもたちにも等しく鑑賞の機会が持てないだろうか。

音楽家の演奏会や出前美術館など、数年に一回程度、学校内で芸術を鑑賞できる機会はある。しかし本当は、音響や照明の整ったホールで、非日常の豊かな時間を味わって欲しい。「あー、素晴らしい演奏だった」という感動を、これからはより多くの人特にこれまで鑑賞の機会が無かった人にどうやって届けるのか。今後の課題でもある。

(立花香)

山田珠実 現代ダンス 高知公演 出演者募集



山田珠実さんのダンス高知公演に出演するエキストラダンサーを募集します。
身体表現の世界を創る楽しさを一緒に味わってみませんか？

募集人数：20名程度

応募資格：ダンス経験不問。どなたでもお気軽にご参加ください。

応募方法：お電話、または必要事項（①氏名②年齢③住所④電話番号）を
明記しメールかFAXでお申込みください。

応募先：高知市文化振興事業団「現代ダンス」係
TEL:088-883-5071/FAX:088-883-5069
e-mail:kikaku@kfca.jp http://www.bunkaplaza.or.jp

応募締切：12月20日（水）17:00まで

公演：日時…2018年1月21日（日）15:00 開演
場所…高知市文化プラザかるぼーと 大ホール

高知市文化振興事業団企画展 Vol.2

撮ること、描くこと、
—杉本春奈・上村葉々子作品展

2018年1月10日（水）～21日（日）
10:00～18:00

高知市文化プラザかるぼーと7F
市民ギャラリー第5展示室

お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071



風伯

『渡邊進著作集』

復刊100号に寄せて書いた一文である。
文章上達は書くことにあるのだと啓発
する。

氏が読書会誌「はまかせ」の巻頭に
毎回書かれた文を集めた『書くことは
生きる』、生きた証を刻むこと』が
この六月に発行された。氏が亡くなら
れて三年、初めてまとまって氏の文章を
読む機会を得た。

「文章は書かないと上達しない。どん
なにくさん名作を読み名文に触れて
も、書かなければ上達しないのが文章
である。自分でペンを執らないかぎり、
いつまでたっても進歩しない。文章上達
の一番の近道は、書くことである。書く
という習慣をつけることが出発である。」
高知市文化振興事業団の初代専務理
事を務められた渡邊進氏が「はまかせ」

今号の表紙

「アツアツのめでたい」

平野絵里加

記念すべき文化高知200号を称えるた
め、めでたい鯛のモチーフを選びました。

これから寒くなる季節に心あたたま
るアツアツのたいやきをどうぞ。

たいやきも無表情ですが、200号の表
紙をかざれること、飛び跳ねるほど喜ん
でおります。

(ひらの えりか/
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)

「ここでは日々の出来事や気付きがわ
ずか六〇〇字ほどのなかに綴られてい
るが、大上段に振りかぶるわけでもな
く綴られた文章が心地いい。たとえば、
「ただぼつんと海を眺めて帰ってくる。
北山をあてもなく散策して帰ることも
ある」とか「眠いときは欲も得もなく
眠る。眠りの太平楽はなにもにも替
えがたい」と、肩に力が入っていない淡々
とした書きまじりがいい。」
渡邊進という感性にもっともつと付き
合っていたい。が、氏の書かれたものは
ほとんど単行本になっていない。今回
刊行されたものの何十倍もの文が、発
表された新聞や雑誌のなかに埋もれて
しまい、一般に触れることは難しいので
はないか。
この機に『渡邊進著作集』なるもの
を発行できないか。印刷所や出版社で
はなく、永く務められた文化振興事業
団で発行することこそがもっともふさわ
しく、氏に教えられ啓発された多くの
後進たちは、それを強く望んでいるよ
うに思えるのだが。
(稜)

GEN YOKOSAKA

魂揺さぶる、 チエロの旋律

横坂 源 チエロリサイタル

【曲目】
J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲 第1番
リガネイ：無伴奏チェロ、ソナタ
アントニー：リチエルカーテ Op.1
黛敏郎：文楽 ほか
曲目が変更になる場合がございます。予めご了承ください。

2017年12月8日(金)

18:00開場 18:30開演

高知市文化プラザ かるぼーと小ホール

一般 前売り3,000円 当日3,500円
高校生以下 前売り2,000円 当日2,500円
未就学児の入場はご遠慮ください
※全席自由



かるぼーと

お問い合わせ 高知市文化振興事業団
TEL088-883-5071
http://www.bunkaplaza.or.jp

©ワーナーミュージック・ジャパン